

を論ずる場合、社会体制が一定のレベルまで明らかにされた歴史時代の考古学的論考から先史考古学を学ぶ者はそのアプローチの方法などから多くのものを吸収することができる。

20) しかしこのことは土器型式が詳細な集落の動態に有効的に作用しないことを述べている訳ではない。言うまでもなく集落の消長という時間

的経過から導きだされる実体に対し、我々のとりうるアプローチの仕方が年代学上の単位(型式)の細分しかないからである。

21) 石井寛「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究収録』第5冊 1984 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

東南部地区における古代農業資料

小高 春雄

1. はじめに

千葉東南部地区における埋蔵文化財の調査も14年目を迎え、とりわけ縄文時代、古墳時代についての資料の蓄積には著しいものがある。また、多くの新発見も特記されよう。昭和61年、同62年度の調査では、古代農業について二、三の新しい資料を得ている。いずれも本県では稀有な例であり、その内容を公表することは意義あることと思われるので、ここに簡単ながら紹介したい。

2. 資料の概要

まず基本的な説明は、第1表で示し、以下個々の資料についてつけ加えることとしたい。

有吉北貝塚の炭化種子は古墳時代の大型住居覆土中より出土しているが、モモ、スモモの若干数

を除けば総て覆土の柱状サンプルを水洗して得られた資料である。すなわち、土層観察用に直交して設けた幅30cmのセクションベルトを、その交点を基準にして縦横30cm、厚さ住居底面までの土塊を一サンプルとして、ひとつおきに採取し、更に、それを層ごとに分割した。住居の覆土は2層に分けられ、その差は色調、混入物の相違によって識別可能であり、資料混入の過程を考える上で必要とみたためである。

切り取ったサンプルは室内に持ち帰り、目1mmのフルイによってウォーターセパレーションを行なった。水洗後フルイ上に残った物質の多くは小礫と炭化材の小片であったが、この中に混って炭化種子が認められた。分離資料は自然乾燥を待ち、ピンセットにより種子と思われる物質を小片まで



第1図 遺跡の位置

- 1 有吉北貝塚
- 2 椎名崎古墳群
- 3 神門遺跡

国土地理院
1:50000 蘇我



■ 左図の位置

とりだした。炭化材の小片の中には種子との区別の難しいものもあったが、その判別は拡大鏡を用いて筆者が行った。このようにして分離選別した資料の内、多少とも形状の窺えるものについてパリノ・サーヴェイに同定を委託した。ここで呈示した416ヶの資料がこれに相当する。

一方、椎名崎古墳群で検出した畑跡（といってそれは畝の間の条溝を認めたにすぎないが）は古墳の墳丘下、新期テフラ層の上面において確認されたものである。本県でも新期テフラは従来より確認されていたが、最近はその降下年代についての資料もふえつつある。当センターの調査例によれば、前期以降、より狭めていえば中期～後期の間にあるといてよいだろう。東南部地区の場合、ここ数年晩期の調査例（包含層）が相次いでいるが、いずれも新期テフラ層の上位にある。もちろん、弥生時代以降もしかりである。それゆえ、この遺構の所属年代も晩期以降に属することはまず間違いないところだろう。そして、古墳の墳丘下にあることから、その下限も古墳の年代（7世紀）を下ることはありえない。古墳の調査ではいつも旧表土、つまり、古墳築造前の地表面がひとつのポイントとなる。それは、単に調査の境界というのみならず、築造前の状況や築造するにあたっての行為について多くの情報を与えてくれるからである。本古墳の場合、旧表土上面には焼土と炭化材、及び炭化材の小片が多く認められた。これは、古墳築造に当って山林を焼き払った結果といてよいであろうか。そうであるとすれば、畑の経営は一旦中断（放棄ではない）していたと考えられよう。旧表土下の土層は新期テフラ層まで、焼土、炭化材のまじった表面の薄層を除けばほぼ一層であり、畑の条溝がいつの時点で切り込まれたか明瞭でない。また、伴う遺物も出土していない。それゆえ、本遺構の所属時期については前記の枠を出るものではないが、このような条溝は鉄製農具の使用の結果と考えるのが自然であろう。

椎名崎古墳群の占地する台地は図でもおわかりのとおり、小谷をさかのぼった山間部にある。東南部地区全体の調査結果では、弥生時代の遺構はほとんど検出されず、古墳時代の初頭になってようやく集落の成立をみる状況である。本古墳群の近辺の台地においても例外なく古墳時代の後期に

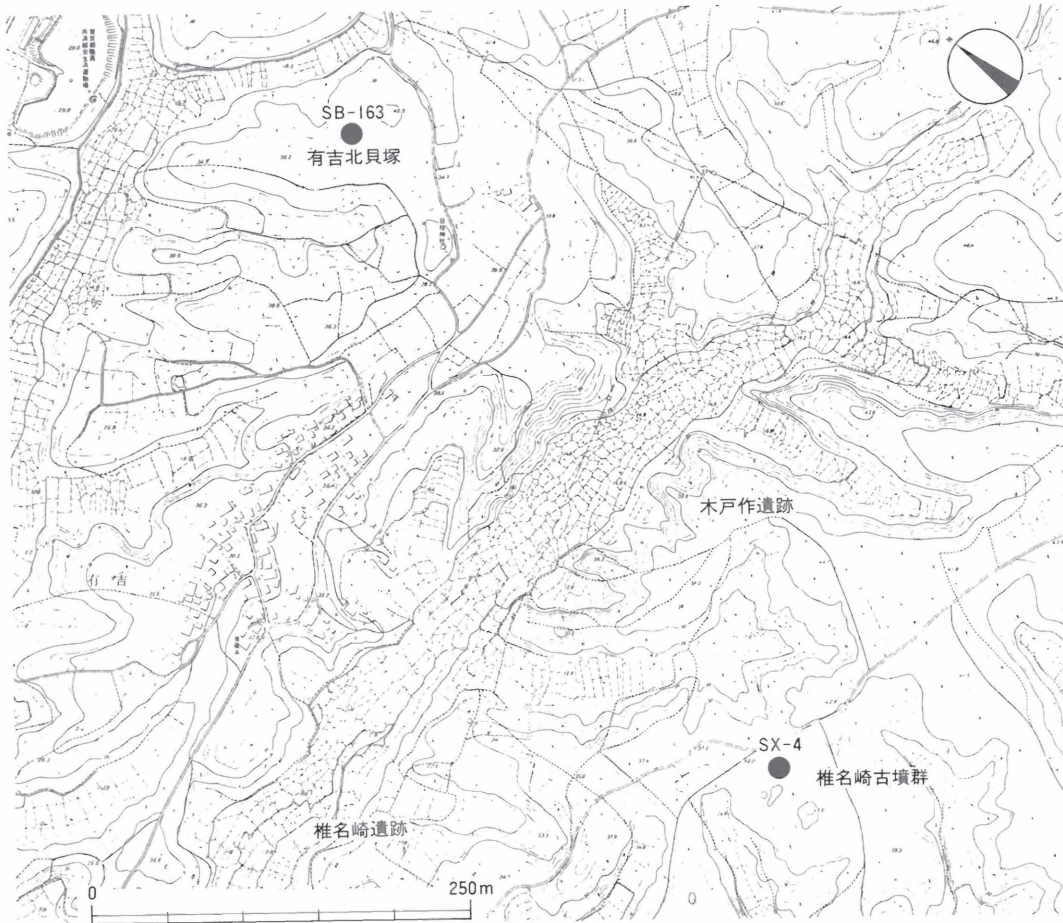
資料名	資料の内訳	所属遺構名	時期	遺跡名
炭化種子	イネ, オオムギ(?), モモ, スモモ, サンショウ, カラスザンショウ 計316ヶ	SB-163	古墳時代	有吉北貝塚
畑跡	畝間条溝8	SX-4墳丘下	(古墳時代)	椎名崎古墳群

第1表 資料の概要

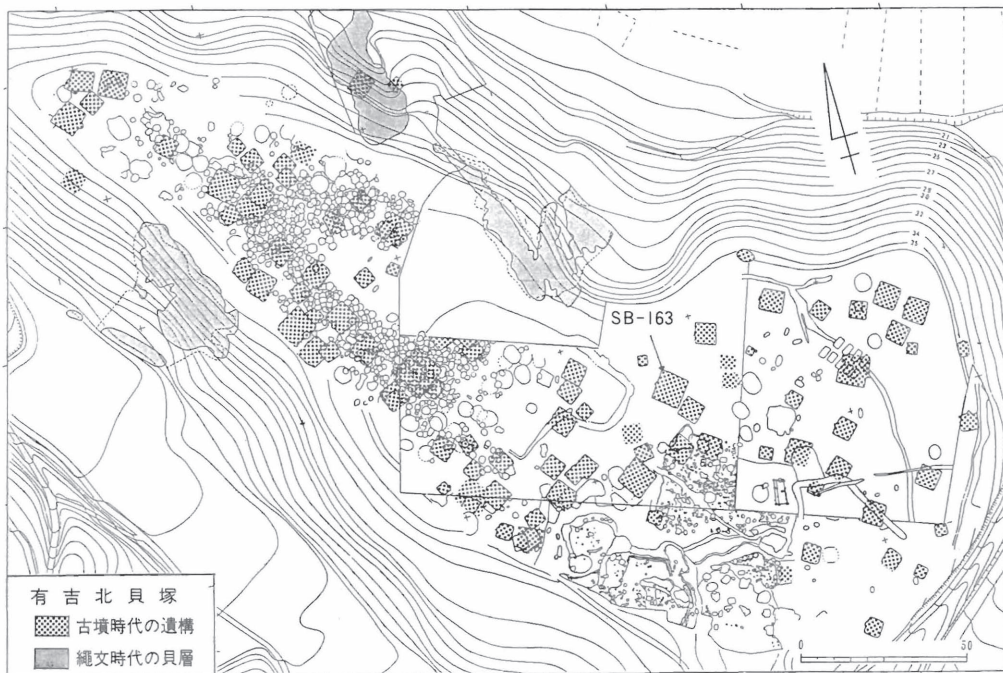
至り集落の成立をみており、そのことからすればこの台地上が畑として活用されたのもこの時期、つまり古墳時代の後期に求めるのが妥当なところであろう。西隣の台地に位置する人形塚古墳の調査では、周溝に接して古墳時代後期の住居跡が一軒検出されているが、これは特殊なあり方である。一方、尾根続きの北方300m、同西方500mにはそれぞれ木戸作遺跡（古墳時代後期鬼高期の住居跡21軒検出）、椎名崎遺跡（同じく鬼高期の住居跡46軒検出）があり、本遺構も両遺跡の住民によって残された可能性が高いだろう。当然のことながらその年代も集落の開始以降、つまり6世紀（～7世紀の初め）に求められるかと思われる。

畑遺構は群馬県など条件のよい地域（周囲にテフラの供給源がある）と比較した場合不利は否めない。歴史時代以降においても畑を埋没させる程のテフラの降下はないし、厚い腐植土と長年の耕作によって検出不可能な痕跡すら止めない状況である。それゆえ、まれに検出した場合はその全容の一端を垣間みたにすぎないことは十分に予想できよう。本遺構もまさにその結果であって、それは、狭い範囲に浅い条溝として示されている。

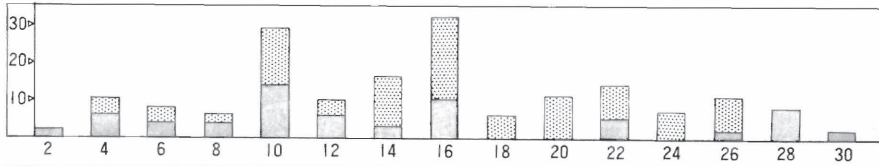
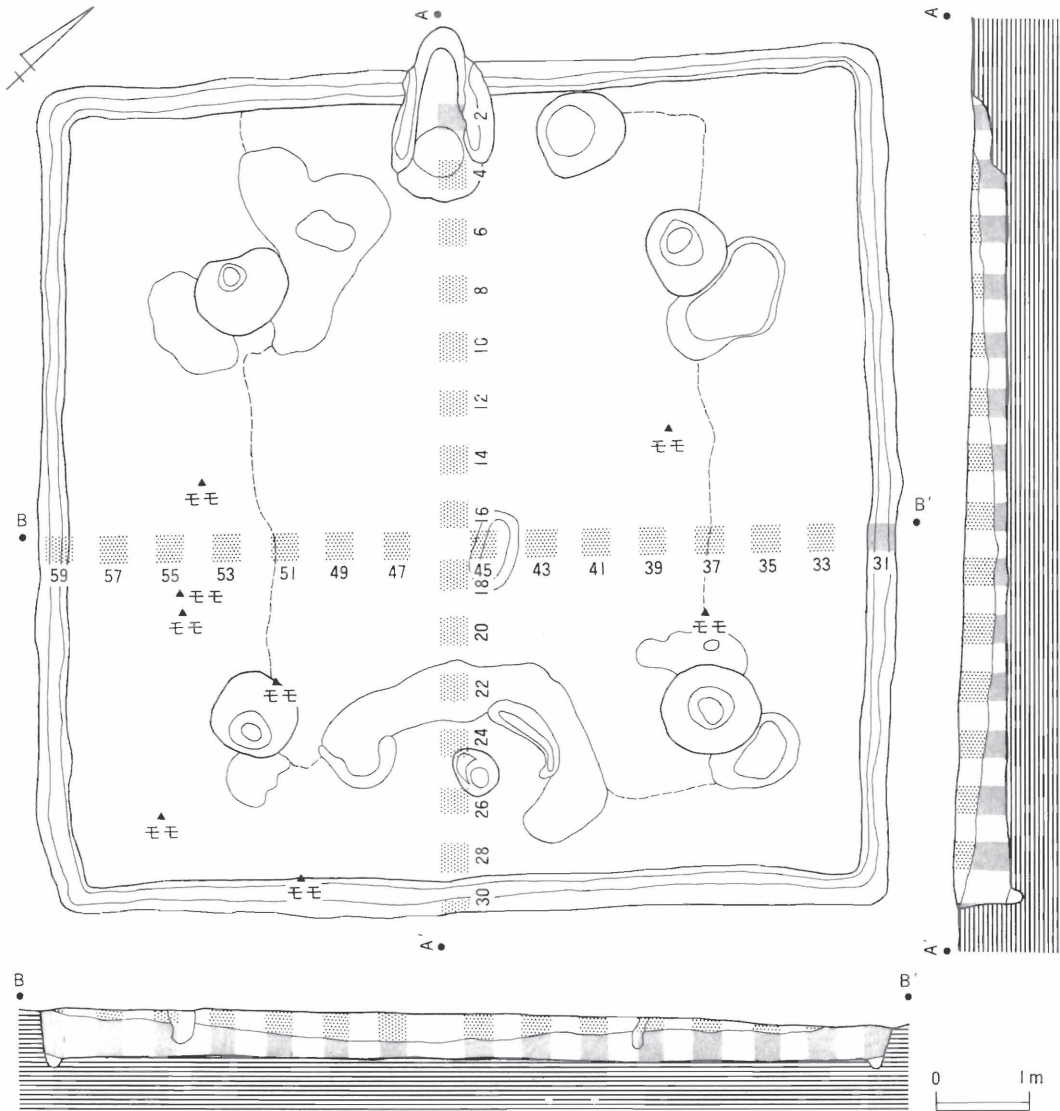
古墳の周囲では旧表土はもちろん、新期テフラ層も認められない。一方、遺構を残したSX-4両隣りの古墳（当然遺構が期待できるわけだが）墳丘下では不明瞭なままで終わっている。西側の古墳はその地形条件（やせ尾根にかかっている）から、東側の古墳は私の不注意（よくみていなかった）から未検出に終わったとみるべきであろう。SX-4にしても、新期テフラ層にきざまれた条溝は決して深くない。本遺構はこれら二重・三重の幸運によりかろうじて日の目をみたといつてよいだろう。



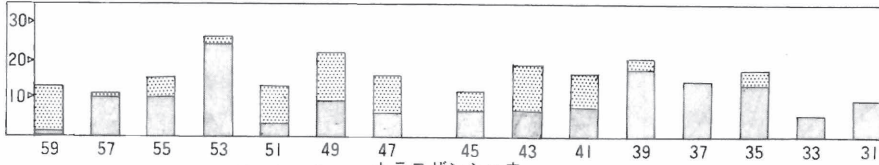
第2図 遺跡周辺の地形



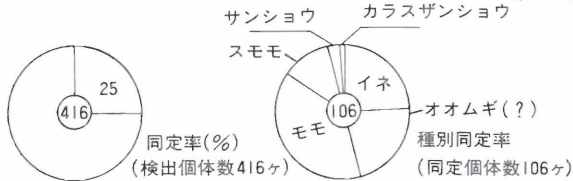
第3図 有吉北貝塚の古墳時代遺構分布図



セクションA-A'
検出個体数

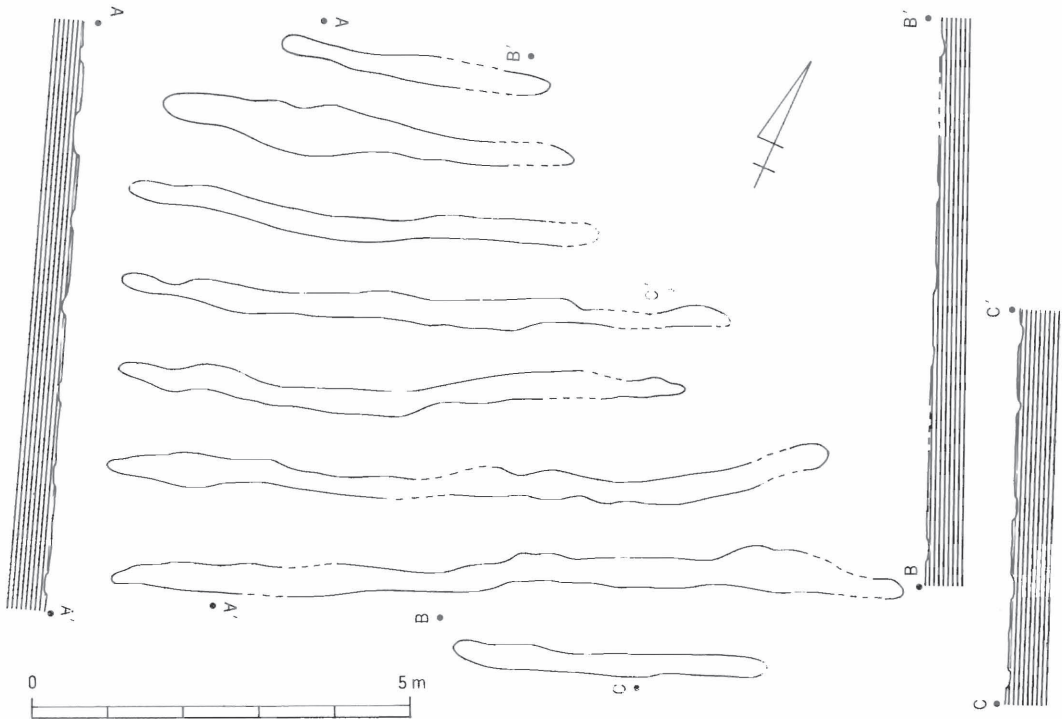


セクションB-B'
検出個体数



- I層 若干のローム粒まじり腐植土層
- II層 若干のローム粒、焼土粒、ロームブロック、ブロック状ローム粒まじり腐植土層

第4図 有吉北貝塚SB-163住居跡炭化種子関連資料



第5図 椎名崎古墳群SX-4墳丘下の畝間条溝遺構



写真1 同上遠景

以上、やや冗長にすぎたきらいはあるが、要するに検出された畑の内容（規模、畝幅、所属時期等）については不十分かつ、それなりの配慮をしてみていただきたいということである。最後にひとつ補足しておこう。条間覆土の土は有吉北貝塚と同様その一部をウォーターセパレーションにかけたが明確な種子は検出できなかった。これは条件の違いによるものであろう。

3. 資料の意味

両遺跡における資料の概要は以上のとおりであるが、ここでは両者の関連とその分析から得られた「成果」についてふれることにしよう。

両遺跡は直線距離にして約500m、その間には東西に大小の谷が横切っており、両者を結ぶ直接の因果関係は窺えない。しかし、既述したように、両者は時期的に近い頃の資料であり、しかも共に古代農業を物語ることは共通している。そして距離的にも近い。これらはその資料的価値を高めている外的要因といつてよいだろう。

有吉北貝塚の一住居跡覆土中より検出した炭化種子のうち、問題となるのがオオムギ（報告では類似種。）であることはいうまでもない。実は不明とした種子の多くはこのオオムギと酷似しており、本来の種別は最も多くを占めていると予想される。覆土の状態や炭化の状況（スポンジ化）からみて、本資料は何んらかの事情で火熱を受けた種子が半ば自然に廃屋の窪みに堆積した可能性が窺える。それも一時ではなく、除々にである。いわゆる火災住居の場合、床面（近く）に焼土、炭化材がみられるが本住居跡の場合、そのような徴証もみられない。ただし、出土の傾向からして、南西コーナーからの投棄あるいは流れこみの様相は看取できる。これは、この台地の地形のあり方や集落占地と対応するものかもしれない。いずれにせよ、この集落の住人が米の他に麦（属）を集落の中にとりこんでいたことは確かである。

有吉北貝塚における古墳時代後期の集落は、図で明らかのように結構密な状態であるが、大体7世紀末葉（～8世紀初め）をもって集落は途絶えている。その存続期間は約1世紀半に満たないと思われるので、一時期の集落としては散在する状況であったと思われる。それゆえ、住居の周囲に畑作を営むことは可能である。また、尾根続きの

南東の台地上も可能性があろう。残念なことに、この遺跡では古墳の築造はみられず、また、後世畑として活用されたために新期テフラも認められなかった。畑の存在を知る手掛かりが失われてしまったのである。

一方、椎名崎古墳群では、逆に畑跡が検出されている。しかし、そこで栽培された作物が何んであったのか特定はできなかった。五穀とは現在でも耳にする言葉であろうが、古代、中国・朝鮮においてもその内容が一定していた訳ではない。麦、黍、粟、稲、豆、麻等、稲が含まれないことも当然であった。我が国でも記紀に稲、粟、麦、稗、豆がみられるのを始めとして、古文献（「和名抄」、六国史等）から多くの栽培作物の存在を知ることができる。稲、大麦、小麦、大豆、小豆、粟、稗、胡麻はその代表的なものであり、これに豆類、野菜類、果樹類が加わることになる。遺跡は台地上の一画にあり、しかも高丘（標高約40m）で、地山はローム層をなす。生息環境よりすれば、麦、粟、豆といったところが適当であろう。黍、蕎麦（古代はソバムギと呼んだ）は記録に乏しい（律令政府は奨励していない）が栽培されていたのは確かである。これはその性格とも関連するのであろう。そういえば、稗も似たところ（備荒用）がある。

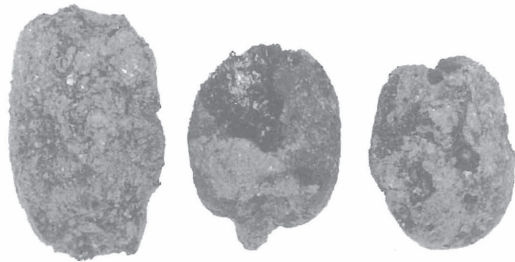
このようにみてくると、検出された遺構はもちろん断定できないが、上記麦以下の栽培が行われた可能性は十分にある。約500m離れた有吉北貝塚出土の炭化大麦（属）もその意味において価値があろう。現在、遺跡の南側を調査中であるが、大小の古墳群、集落跡の検出も予想され、類似の資料が検出、出土する可能性がある。

遺構との関連についても若干記しておこう。焼畑の場合はともかくとして、土を耕し畝をつくり、草をとるという作業は古代からあった（たとえば「延喜式」）。本遺跡でみつかった条溝は「畦」立て、あるいは、中耕時の鋤の痕跡が新期テフラ層を掘りくほめた結果であろう。つまり、そこで見出されたのは耕作に伴う痕跡であって、畑（なお参考までにいうと、文献では陸田である）の総てではない。それでもこのような痕跡が場合によっては検出できるということに我々は注目すべきである。

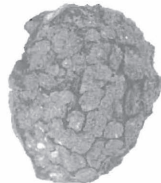
麦以外はどうか。遺跡周辺の谷田の開発



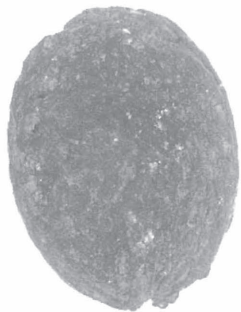
Prunus persica (モモ) × 2



Hordeum sp. (オオムギ属) × 7



Zanthoxylum piperitum
(サンショウ) × 8



Prunus salicina (スモモ) × 4



Oryza sativa (イネ) × 7



Zanthoxylum ailanthoides (カラスザンショウ) × 8

写真2 SB-163 住居跡履土と出土炭化種子

が集落の年代、つまり、古墳時代後期に求められることはほぼ確実で、米の出土もそれに対応するものと思われる。ただし、地形図で明らかなごとく、可耕地（狭い谷）は限られている。畑作にたよる状況は十分に予想されよう。

モモは古墳時代の遺跡ではしばしば検出されているが、これにスモモを加えることができた。これらは遺跡内で栽培されていたとみるのが自然である。

サンショウは香辛料として現在でも用いられている。ただし、山野で自生するものであり、本例が採集の結果かどうかは定かではない。

4. まとめにかえて

以上、東南部地区におけるふたつの古代農業資料について紹介、解説した。ふたつの資料はその資料的価値という点でお問題点を含んでいるものの、この種類例の少ない本県下においてなされたことで一定の評価・検討の余地があると考えている。

弥生時代以降、集落の周辺に耕地が存在するのは自明のように思われている。しかし、耕地を始めとして、当時の生活実感を具体的に引き出してくれる調査例はきわめてまれである（群馬県黒井峯遺跡はその数少ない例である）。幸い、当地域では両遺跡はもちろん、歴史時代の水田跡が検出された神門遺跡（第1図）も存在する。低地の本格的な調査として、本県では特記すべき例といえるが、それゆえに発見に至った要因となったわけである。ひるがえって、有吉北貝塚の場合、念のため土を持ち帰ったことが好結果につながったし、また椎名崎では既述のような条件が発見の伏線となった。ここでの条件、及び調査・分析の過程が一律に適うものでもないが、事前の注意をもって当れば更に決定的な例証が得られるはずである。

多古町新城遺跡で見つかった「炭化したおにぎり」は未だに記憶に新しいかと思われる。しかし、こと麦に関しても、市川市須和田遺跡（大麦。住居跡床面より出土。10世紀代か。）富津市下北原遺跡（多量の大麥に若干の小麥。直良信夫氏が麦そのものについて詳細な報告を行っているが、出土状況や年代等は詳かでない。歴史時代以降か。）、更に最近では当センターで行った君津市外箕輪遺跡（多量の大麥？。井戸跡より出土。鎌倉時代。

調査担当者笹生衛より教示。）を挙げるができる。もちろん更に類例はあるだろう。また、状況を物語るものとして、船橋市海神遺跡のように、コシキの中で麻布（？）に入れた米が発見された例（古墳時代か）もある。「偶然」の結果も少なからずあるというわけだが、その事例を多くすること、これもまた十分に可能なはずである。

引用参考文献

三森俊彦、阪田正一他 「千葉東南部ニュータウン2」（財）千葉県文化財センター 昭和50年

及川淳一他 「千葉東南部ニュータウン6」（財）千葉県文化財センター 昭和54年

（財）千葉県文化財センター年報 No.12 昭和62年

鑄方貞亮 「日本古代穀物の研究」 昭和52年

千葉市教育委員会 浜野川・神門遺跡現地説明会資料 昭和63年

金子浩昌 「須和田遺跡出土の炭化大麥—古代麦作農業とその遺物—」 古代第14・15合併号 昭和30年

直良信夫 「日本古代農業発達史」 昭和31年

財団法人 千葉県文化財センター
千葉東南部地区有吉北貝塚出土炭化種子同定報告

貴，財団法人千葉県文化財センター殿より御依頼のありました，千葉東南部地区有吉北貝塚出土炭化種子の同定が終了しましたので，結果を御報告致します。

1. 試料

試料は，古墳時代後期（鬼高期）のものとする S B-163住居址から検出されたもので，発掘調査過程で遺物として取り上げられたもの10点と，土壌試料を水洗篩別して得られた1mm以上の残渣中から拾い出されたもの51点である。

2. 方法

試料を肉眼および双眼実体鏡下で観察し，同定・計数した。同時に同定された種実の拡大写真図版（図版1）も作成した。

3. 結果

試料はいずれも炭化しており，完形のもの少なく同定できないものもあった。同定された種実は以下の3科6種類（Taxa）である。

GRAMINEAE（イネ科）	Oryza sativa（イネ） cf. Hordeum sp.（オオムギ属類似種）
ROSACEAE（バラ科）	Prunus persica（モモ） P. salicina（スモモ）
RUTACEAE（ミカン科）	Zanthoxylum piperitum（サンショウ） Z. ailanthoides（カラスザンショウ）

各試料中から同定された種類および個体数はつぎのようなものである。なお，破片も1個にかぞえた（表1）。

同定された6種類のうち，イネ・オオムギ？・モモ・スモモはいずれも古い時代に渡来し食用とされている栽培種であり，サンショウも香辛料などとして有用な植物である。欠失部分のある炭化種子であるため，種類不明のものが多いが，同定された種類をみるかぎり，人間生活に密接に結びついた植物のみが検出されているといえよう。住居址の覆土から検出されていることから，当時の人々が，同住居内で貯蔵または調理した食糧の一部がなんらかの原因で炭化し，残存したものであろう。

表1 S B-163検出の種子個体数

種名	個体数
イネ	25
オオムギ？	23
モモ	43
スモモ	11
サンショウ	3
カラスザンショウ	1
不明	310
合計	416